

とルネサンスとの関係を考察する。この問題はすでに多くの学者によつて論じられた問題であるので、詳しく紹介する必要はないが、ハレッキの意見の特色の一つは、もし強いてこの二つの時期の区分を求めるならば、大体十四世紀末（一三七八年前後）におくのが妥当であることを、諸事實をあげて、とくに東欧に關する史実を引用して主張していることである。それはこの時をもつて、「ヨーロッパ共同体」の分裂をみているからである。

それではいわゆる「近世史」と「現代史」との区分はどうであろうか。前述したようにヨーロッパ史をヨーロッパ時代と考へ、現代すでにその終末をみているとする著者にとつては、ヨーロッパ史の「現代史」はありえず、それはむしろ彼のいう、「大西洋時代」に属するものでなければならぬ。従つてこの第九章で考察しているのは、この大西洋時代の開始と展開に他ならない。最後に、自由の問題を論じつつ（第十章）ハレッキはその著を終つている。

以上が本書の簡単な内容である。著者がそ

の主張を立証しようとして引用している具体的な事實をほとんど省略したために、この紹介は極めて力弱いものになつてしまつた感がある。しかし、私が本書を紹介した目的は、前にものべたように、ヨーロッパ史の最も基本的な問題、ヨーロッパ史の時代区分とその構成にある。彼の行つた事實の解釈には簡單に賛成できないものや、ことに東欧の歴史に關する事實については私にはほとんど無知であるために、全面的に彼の主張が正しいと斷言することはできないにしても、従来のヨーロッパ史、その三時代区分法に対する批判には、充分傾聴すべきものがあるように思われる。

彼の基本的立場、すなわちヨーロッパを本質的にキリス教的共同体とする見解や、そのロシア史に關する解釈には、賛成できない人も多いであろう。しかし、東欧の歴史をヨーロッパ史の重要構成要素として取上げ、その視点からヨーロッパ史を再構成しようとする彼の意図は、世界史の構成について、多くの問題をもつ今日のが国の歴史学界に、興味ある示唆をなげるように思われる。というの

は、従来の世界史が、もつぱらヨーロッパ史であつたことを考えるとき、ハレッキが、ヨーロッパ史について行つた再編成を、世界史について、われわれが行いうる可能性と必要性とを強く刺戟するものがあるから。

最後にハレッキと全く同じではないが、同様な立場から「ヨーロッパ史」を批判し、極めて教えられるところの多い書物として、ドーンソンの *Understanding Europe* (London, Sheed & Ward, 1952) があり、兩書を並読すれば、叙上の問題について教えられるところが多いことを記して、この素雜な紹介を終りたい。(B 6 版、二四二頁、邦貨約五八〇円)

— 前川貞次郎 —

二つの文化變動理論

W. F. Ogburn : *Social Change, new edition with supplementary chapter*, New York, 1950.

B. Malinowski : *The Dynamics of Culture Change*, New Haven, 1945.

— 1 —

文化の變化に關する研究は、最近の人類学

乃至社会人類学の主要テーマの一つとなつて
いる。此の傾向は、もと未開民族の未開文化の
研究を自らの課題とした文化人類学が、この
数世紀以來欧人との接触によつて急速に原状
を破壊されていく未開文化に直面する時、当
然惹起された態度と考えられる。そして之は
又、かような未開人の土地を植民地として統
治していく欧米諸国家にとつて、必然的に要
請される研究分野であつたとも考えられる。

勿論それ迄にも文化の変化に関する研究が、
人類学者に依て投開視されていたわけでは無
い。人類学におけるいわゆる歴史学派の研究
も、広い意味では之に属するものと言えよ
う。然し之においては、模範の彼方にある未
開文化の歴史が、幾つかの段階乃至は層位と
して靜的に復原されるに止まり、躍動的なプ
ロセスとしては把握されることがなかつた。
之に対し、今日「文化の変化」として問題に
される研究は、第一に今日進行しつつある文
化変化をそのプロセスに沿つて動的に扱へよ
うとするものであり、第二にその変化を主と
して欧米文化と未開文化との接触によるそれ
に限つて扱おうとする処に、著しい特長をも

つのであつて、その点現實的或は実用的な色
彩が濃いと言えるのである。

文化変化の研究に関する、右のような立場
と並んで、今一つ別の立場も認められる。前
者が欧米文化との接触による未開文化のいわ
ば混沌状態を対象としたのに対し、之は文明
社会における社会の混乱——機械文化の極度
の發達がもたらした幾多の社会問題——此処
に問題を發するのである。現實的な問題提起
の仕方において相通じながらも、着眼点は未
開と文明との殆ど両端に位置している。そし
て又、前者が当然「異文化間の接触による変
化」を主として扱うのに対し、後者の場合で
は寧ろ「発明の増大とそれによる変化」が中
心に置かれるのである。然しながら、此のよ
うな相違にもかかわらず、凡そ人間社会の文
化の変化を問題とする以上、右の両者は理論
的に相通ずるものとならねばならない。いづ
れの側からにせよ、現代の文化人類学は此の
点につき如何様に迫つてゐることか。此処に
夫々の立場をとる二つの著作を取り上げて、
若干の展望を試みたいと思ふゆえんである。

二

W. F. Ogburn によつて文化変化 Culture
Change は、社会の変動を来たす原動力とし
て先ず扱えられている。従来少なからぬ人々
が、人間の生物学的進化に基いて、社会の進
化を説明しようとした誤りを指摘して Ogburn
は次の如く述べる。「不変なるもの」を
以て「変化を説明することは出来ない。人間
の生物学的変化は此の二千年來殆ど認められ
ず、又人間の知能が此の間に特に發達したと
言う証拠も無い。従つて社会の進化を説明し
得るものは、生物学的因子以外の他の因子で
なければならぬ。そしてそれは変化するもの
としての文化である (p. 371)。

それならば、文化は何に依つて変化し、そし
て社会進化を来たさしめるのであるか。其れ
には四つの因子が考えられる。第一は Inven-
tion である。そして発明は更に三つの条
件に応じて生み出される。その一は知能であ
るが、之を挙げるとは、発明が優秀な知能
から生み出されることを認めるものではあつ
ても、知能自体の發達を意味することではな
い。唯、時代と共に増大した人口が、優秀な

知能の絶対数をも増加させ、従つて発明の因子を増加させて来た事は否定出来ない (p. 887)。その二は発明に対する社会的要求である。「必要は発明の母」と称せられる如く。

その三は「既存の文化基盤であつて、或意味で「既存文化は発明の母」と称し得る。例えば、車を使用した或機械の発明は、それ以前に既に車自体が発明されていたことを以て、可能とされるのである (p. 879)。問題は之に關連して文化変化の第二の因子、Accumulation に移行する。一度発明された文化財はそれが効用をもつ限り保有され、蓄積されて、新たな発明の爲の基盤を提供する。発明とは、多くの場合既存文化諸要素の結合であり、従つて諸要素の蓄積の増加に伴つて、諸要素の結合、即ち発明の數も増加する (p. 880~882)。だが、蓄積は単に新発明の附加のみに依て行われるのか。其処には文化の固執性が潜んでいるのではないか。嘗て H. B. Taylor は之を *Survivals* と呼んだのであるが、現代の民族学者は之を *Cultural Inertia* と稱している (p. 148)。それならば此の慣性の原理は何であらうか。Ogburn はそれに

就て次の八事項を指摘している。一、同一の文化が異つた時に異つた効用 (心理的にせよ) をもち得ること。二、既存の文化を使用することが、新文化を発明乃至採用するよりも容易であること。三、新文化の採用が却て不利益を来さず場合のあること。四、経験すみの既存文化の方が安心がゆくこと。五、習慣的に既存文化を墨守すること。六、定型からの逸脱に対し社会的な矯正があること。七、*the Good Old Days* が咏嘆されがちなこと。八、変化を怖れる人間心理のあること (p. 154~158)。以上諸因子に支持される文化の慣性が、それにも拘らず附加される新発明と相俟つて、文化の蓄積を推進し、之が逆に発明の基盤を提供することとなるのである。

次に文化変化の第三の因子として *Diffusion* が挙げられる。他から新しい文化要素を借用することは、それを自ら発明するよりは容易であるが、然し之においても発明の場合と同じ三つの条件が必要とされねばならない (p. 885~886)。就中、既存の文化基盤は重要で、例えば或文化 A の存在が他の多くの発

明 B・C・D・E 等に依存している場合、B・C・D・E 等を所有せぬ他の文化の中に A が採用されることは甚だ困難である。即ち、二文化間の差異が大なる程、*Cultural Diffusion* の困難は増大する (p. 163)。

文化変化の第四の、そして最後の因子は *Adjustment* である。何等の社会変化なしに永く固定した社会は *equilibrium* にある。それ迄の試行錯誤を通じて、様々の部分は相互に *adjust* し、其処には文化諸要素間の調和的な關係が認められる。然るに今、文化の或部分に重大な変化が生じたとすれば、右の調和は破られ、此の変化に *readjust* する過程として關係部分にも変化が誘發されねばならない。失はれた *equilibrium* が恢復されねばならぬのである (p. 389~390)。かくて、発明によるにせよ借用によるにせよ、文化の一部の変化は、連鎖反応的に他の部分の変化をも惹起する。だが、此の *Readjustment* は必しも速かには行われない。新しい変化に *adjust* する部分は何程かの遅れを示す。Ogburn は此の現象を *Cultural Lag* と呼ぶ。此の遅れが取戻される迄の期間を *Maladjust-*

stment の時期と称するのである (p. 200~201)。然し何故に Cultural Lag の現象に起るのであろうか。Ogburn は次のように答えている。先に Cultural Inertia に関して述べた事柄の多くが此の場合にも或程度妥当するが、更に以下の諸事情が考えられる。一、機械的な障害。例えば、嘗て米国の諸州立法官は二年毎にしか集会することがなかつた。そして唯、之だけの理由から、法令が諸州に拡まるのに相当の時日を要した。二、社会の異質性。社会が幾多の階級やグループから成ることは、その間に往々利害の背反を生じ、之が文化の変化にも及ぶ場合が少くない。三、文化要素間の結合度。変化した要素に緊密な結合関係をもたぬ他の要素が、緊密な結合関係にある他の要素に較べて、変化の遅れるのは当然である。四、文化諸要素間の結合関係。X が夫々 Z 及び Y に対して密接に結合している時、Y は変化したが Z は変化しなかつたとすれば、X は Z に結合していない場合に較べて変化の速度が劣る。五、グループの評価。特に道徳や慣習について妥当するが、物事の当否と言つた情緒的価値は、習

慣・条件反射・社会的圧力・昔日への愛着と言つた諸原因に依つて、変化への抵抗となり勝である (p. 256~265)。以上諸理由に依つて Cultural Lag の現象は生起するが、先にも述べた如く、之を殊更に Lag として認めるゆえんに、文化諸要素間の Equilibrium が前提されているからに他ならず、更に現実に存在する幾多の社会的矛盾——社会問題が、此の Cultural Lag の仮説を実証するが如くに見受けられることも与つている。

Ogburn は文化変化の因子を以上四つに求め、之に依つて如何なる文化の変化をも説明し得ることは、恰も Darwin の生物進化論における Variation, Natural Selection, Heredity の概念の如くである」とその立論を結ぶのである (p. 393)。

処で右の理論展開において、今一つ注目すべき事柄がある。それは Ogburn が文化の変化において、主導的役割を演ずるもの、主として物質文化であるとする見解である。それは勿論、非物質文化の変化が先行し、物質文化が後に之に adjust する場合のあることを全く否定するものではない。然し、と

Ogburn は言う。非物質文化なるものの大部分は、本来物質文化か自然環境或はその両者に対して adjust する為の Method であると思はれる。それ故、かような Method of Behavior は、自然環境或は物質文化が変化した場合には、恐らく自らも変化を余儀なくされるに違いない。社会組織と言ふような非物質文化が、唯々に物質的条件に適應する手段であるだけに止まらず、Sociality に対する欲求にも応ずると言ふ、独自の目的をもつものであることは否定し得ないが、さりとて物質文化が Method of Behavior に adjust する目的で屢々変るとは一層考へ難い。物質文化は寧ろ、スピードの増加とか、能率とか、或はエネルギーの節約とか言つた個々の欲求を充たす為に新たな發明を生む場合が一般なのである。而も、之等の欲求から生れた物質文化の新たな發明が、非物質文化の之に対する Adjustment を誘発していることも、極めて屢々認められる処である。更に、發明の基盤としての文化の蓄積度を較べると、此処でも概して物質文化の優位が認められる。物質文化の蓄積的な性格は自明であ

るが、一方非物質文化の領域では、科学など極く少数を除いて、宗教にせよ、家族組織にせよ、或は又芸術や政治組織にせよ、大部分のものは余り蓄積的とは思われない。かくて、此の観点よりすれば、発明の為される程度は物質文化の方が非物質文化よりも多かるべきことなる。Ogburn は以上の様な理由から、文化変化における主導的因子として物質文化の変化を強調しているのである (268~277)。但し Ogburn は最後に次の如き注意を加えることを忘れない。右の見解が唯

物論と言われるものと同一視されるわけではない。物質と觀念との対称は一般に社会学的因子に關してではなく、人生的価値に關して為されている。吾人は非物質文化の作用を否定することなく、物質文化の影響を認めることが出来るのである。と (p. 277~278)。

以上、文化の変化に關する Ogburn の分析の概要を紹介したわけであるが、始めにも述べた如く、生物学的変化ではなくしてかような文化の変化を以て、彼は社会変化の主要因とする。もとより社会と文化を同一視するわけではないが、社会の変化と言う場合で

れは主として、Social Organization とか宗教・芸術・法律・慣習等々の如き Social Ways of Behavior とかの変化を意味するものであり、之等 Social Organization や Social Ways of Behavior は社会的所産としての文化に他ならないからである。

Ogburn の所論に対しては、その Cultural Lag の仮説、或は文化の Equilibrium などについて、批判の余地無しとせぬであろうが、ともかくも文化の変化についてかように精細な分析を尽したことは、文化人類学者の業績としてかなり評価されて然るべきであろう。

三

Ogburn においても Diffusion は文化変化の因子として挙げられたが、Malinowski においては、之が前面に現れる。と言々の言、前者においては、文明社会内に頻々として起る発明に依る文化変化が主要關心事であり、研究動機でもあつたのに対し、後者にあるのは白人と未開民族との接触に依る文化変化が問題とされるからである。Malinowski はその巻頭において、文化の変化は In-

dependent Evolution か Diffusion かに依り起ると述べているが、その著の標題“…… Culture Change”にも拘らず、実際に扱っている処は、専ら Diffusion の問題である。処で、此の Diffusion と言う言葉の人類学的な定義であるが、アメリカの諸人類学者は類似的の Borrowing とか Acculturation とか言つた言葉と並べて、夫々やかましい區別を行つてゐるようである。それによれば、その區別は夫々の研究態度の相違によるようである。達成された文化移行を研究する場合は、Diffusion と呼ばれ、移行のプロセスが問題となる時は之を Acculturation と称する如くである。然るに Malinowski にあつては、

かようなアメリカ学者の區別は用いられず、Acculturation と言つた用語は用いられない。けれども、之も同じく標題の“Dynamics ……” が暗示する如く、その扱ひ処は実は Acculturation に他ならぬのである。

それ故、Malinowski はその立論に當つて、先づ所謂文化史的民族学派で代表される、在來の Diffusion Theory に対して批判の矢を放つ。彼等の研究は甚だ示唆に富むものでは

あるが、我々が今日眼前に進行しつつある文化の伝播に就ての实地研究から得た新材料に依て、検査し直す必要がある。伝播のプロセスと言ふものは、彼等の言う如く無差別な偶然のやりとりのプロセスではなく、我々の体験的研究に依れば、それに与へる側の一定の権威と圧力、受け取る側の決然たる抵抗に依つて規定されるものである。そして又、伝播の結果変化するのは、個々の特質又は特質複合ではなくして、オルガナイズされた組織或は制度であることを知らねばならない (p. 19)。要するに Malinowski は此処で、

従来の Diffusion Theory に見られた、伝播の現象を諸文化特質の単なる組合せの変化と見る如き、寧ろ靜止的・非有機的な見解を非難するわけなのである。

右に述べた、変化するのはオルガナイズされた組織或は制度であると言ふ観方、之が Malinowski の立場の中核を為している。そして此の観方は、文化と言ふものを一つの Integral Whole と観る、いわゆる機能主義の立場からそのまま出たものであつた。先に述べた Ogburn が、文化諸要素間の Adj-

stment を仮定し、一要素の変化が他の諸要素との Readjustment を求めると考えた処は、一見 Malinowski との親近を思わしめるが、然し前者にあつてはそのプロセスが極めて機械的に扱われ、Readjustment の後に現れる文化の全体的変化は殆ど無視されていた。然るに Malinowski においては変化のプロセスのダイナミックな把握に関心が寄せられ、其処に現れる Integral Whole としての文化の変化が問題とされるのである。Ogburn が、A が A' に変れば B も B' に変ると言つた処を、Malinowski はその B' に変わるプロセス、そして變つた A' と B' とがどの様な變つた全体を生み出すかが問題なのだと考えている。然し之は寧ろ兩者の問題点の相異なのであつて、兩者が絶対的に相容れ合はぬものであるとは思われな。それよりも Malinowski の立論は先に觸れた Diffusion Theory 否定の方向で展開される。

伝播による文化の変化とは何か、それは相異なる二つの文化の Conglomerate である Mixture でなければ、部分的に融解された諸要素の Juxtaposition である (p. 21)。そ

れは單なる融合や混合ではなくして、異つた方向へ方向づけられた何物か (p. 22) であり、一つの新しい文化的實在 (p. 23) なのである。例えば衣服を採り上げて見よう。今日アメリカにおいて白人の家庭にボーイとして傭われたり、或は白人の鉱山に従業する原住民の服装は、白人の衣服に影響を受け乍らも、その実白人からの型を引写したものでなければアフリカからのものでもない。即ち、白人からの衣服の採用は、「孤立した特質」を譲り受けることではなくして、オルガナイズされたプロセスの結果として独特の衣服を生み出したのである (p. 23)。又或は、アフリカにおける鉱山企業を考えて見るに、草原に設置された鉱山設備一式と之に向うアフリカ人労働者の群、之だけではまだ鉱山を構成していない。それは此の企業を創めるのに必要ではあるが充分ではない、一組の条件としてしか見做され得ない。「借用」が終る処に文化変化は始まるのである。一度産業が始まれば、それは最早単にアフリカ人とヨーロッパ人とへ分解され得ない、一つの現象となす。人種間の差別待遇に基いた労働賃銀・一

法的な犯罪処罰・契約履備の勧誘等、之等はヨーロッパにとつてもアメリカにとつても新しい、いわば第三の實在なのである (p. 23)。要するに、一つの文化から他の文化への諸要素の機械的編入と云ふ観念は、否定されねばならない。

処で右の如き新しい文化的實在の誕生のプロセスを辿ることは、最も歴史的な研究であるはずであるにも拘らず、従来 Malinowski は歴史否定論者と見做されがちであつた。事實、此の著書に於ても The Value of History and its Limitation と言う一章が含まれている。然し、彼は決して歴史的研究を否定するものでない。唯、彼が否定するのは不確かな推定の歴史の再構成なのである。それも「文化変化」の研究に就てであつて、科学的民族学の課題の一つとしては歴史の復原を認めている (p. 28)。唯、Dr. Mit が文化変化と言ふことを本来的状態の混乱としてしか理解せず、従つて Zero Point と言ふ言葉で表現される、白人との接触以前の原住民文化の復原を以て文化変化研究の出発点とする、このような態度一般を否定しすぎない。

い。それは第一に、原住民の記憶のみに殆ど頼る過去復原の不確か、第二に文化変化の研究は其の時点に迄さかのぼらず現在観察の範囲内で充分果され得ること、の二つによる。そして、此の第二の点で Malinowski は却て自らの立場の歴史的であることを表明している。即ち、彼は「歴史は繰返す」とは文化のプロセスに普遍的な法則があると言ふ意味で正しいとし、歴史家は歴史の復原に當つて史料のみならず此の法則にも頼らねばならぬと言ふ。そして此の法則は又逆に、歴史のあらゆる段階から——現在からも——抽出される。文化変化を正常文化の混乱と考へ、其処にのみ問題を絞らずとも、現在進行している事實の内に文化変化のプロセスの法則は把握されるのである。従つて、最も小さなスケールで時の要素を取り入れるにすぎぬにせよ、之は真に歴史的な意味においてなのである (p. 27~40)。

それならば Malinowski は之をどの様な手続きで為そうと言ふのか。彼は一種に白人の統治原理・宣教師や教育者の理念、企業家や植民者の関心などを置き、他の極にそれが

今日の生活にとつて活動的な力として残存している限りにおいて原住民の伝統的制度や過去の記憶や伝承を置く(今日には何等の機能ももたぬ復原された過去は置かれぬ)。唯、科学的に信頼される場合にのみ、参照されることもある)。そして両極の夫々対応する事項につき、両者の接触・反撥・協力し相互に影響し合うプロセスと活動を中間に置く。そして此の結果が再び両極の夫々に現れ、従つて中間項も新しく生ずる。観察の限りにおいて之が継続されるのである。そして此の中間項こそが常に、新しい第三の文化の实体に他ならないのである (p. 73~83)。

此の様な手続きを経て分析が行われる時、其処には文化のプロセスに関する何等かの法則が見出されるに違ひない。接触以前の静止的な両方の文化を夫々研究して見た処で、接触の結果を正当に法則づけることは出来ない。接触の結果は両文化諸要素の機械的な組合せとは異なるからである。変化の法則は変化のプロセスの中のみ見出されねばならぬ。

以上 Malinowski の立場の概略を紹介し

たわけであるが、等しく文化変化の研究を称し乍ら先の立場との逕庭は掩い難いものがある。Ogburn が専ら文化変化の契機の究明に当り、勢い機械的分析に終止し勝ちであつたのに対し、Malinowski は変化のプロセスの法則を求めてプロセスの中に身を投じた。そして之は所詮「文化は何故変化するか」と

「文化はどのように変化してゆくか」と言う問題意識の相違に帰着する。前者が現代文明の茫大さに対する省察に連がるとすれば、後者は奇妙な変化を経過しつつある植民地原住民文化とその統治策とに關連する。Malinowski は自らの此の立場を良く意識し、文化変化の研究に従事する人類学者は、植民地統治の實際問題に觸れることを免れ得ないと述べている (p. 5)。そして、それと言うのも、今日歐米文化に「汚れざる」孤立した未開文化と言うものは存在せず、存在するのは接触し変化の過程にある文化だけだからである (p. 21-3)。然し先に述べた如く、Malinowski の求める處が結局文化変化の普遍的な法則であるとするならば、研究のフィールドは植民地原住民に限られるわけではない。それは植民地での

研究が、局外に立つて観察し易く、且つ問題がより単純で分析し易いと言う便宜的理由に基くものだと言う (p. 1)。然りとすれば、当面の問題意識とフィールドの相違にも拘らず、文化変化の法則を求める限りにおいて Ogburn と Malinowski との逕庭は必しも絶対的とは思われないのではなからうか。

— 石川榮吉 —

最近の日本考古学の 発掘報告書

ここでは、大体この一年間に發表された報告書について、重要と思われるものを数点取り上げることとする。むしろ、このように一括して論じた方が、その特色を把握し易いこともあろうかと考えるからである。

敗戦以来、考古学に対する関心が高まるに従つて、発掘事業は誠に多い。しかしながらそれに必然的に伴うべき報告書の出版は誠に少い。その意味に於て、これらの報告書の意義は第一に出版そのものにある。一日も早くかかる傾向の是正が行われねばならない。次に、「吉胡」は別として、他の報告書がすべ

て学会に關係することは一応注目してよからう。これは、正常な道が学会の推進によつて行われて居ることを示唆する。

従来、特に古墳關係に於ては、偶然の機会からする発掘が多かつた。各種土木事業による破壊に先立ち、充分の學術調査の行われることは、極めて有意義であり、今後も力を尽さねばならぬことは言う迄もない。しかし、それと同時に学界の問題点を説明せんがため、或る目的を持つた計画的発掘の必要は大い。その傾向が以下に紹介する報告書に認められるのは当然のことではあるが、ここにも意義を認むべきであらう。

松本信廣・藤田亮策・清水潤三・江坂輝弥
加茂遺蹟——千葉県加茂独木舟出土遺蹟の研究——(三田史学会、考古学・民族学叢刊第一冊)

本書は慶応大学考古学研究室の事業として行われた千葉県安房郡豊田村加茂遺蹟の調査報告である。遺蹟の地誌学的記述や、発掘の経過などの遺蹟に關する諸項と、木製遺物の記述を清水氏が、土器と石器を江坂氏が分担